

千葉 喬三

「2つのエコ」



近頃は何でも「エコ エコ」です。大方は、これを環境関連、すなわち「Ecology」のエコと素直にとっておられるのですが、ヘソのねじ曲がった私などは何時もこれは「Economy」のエコだと思っています。EcologyとEconomyは同根で、家・家政・生活を意味するギリシャ語のOIKOSからきています。その意味では同義に近いはずなのに、今日これほど対置的な内容を負わされている言葉も少ないのではないかと。

いろいろあります。エコ減税。こんなものも単なる売買（経済効果）のことで、環境負荷すら助長しています。それと例の生物多様性会議。生き物の衣を着た人間（国）の利権（金）の奪い合い。極めつけは、イラカぼけか知らないが、現金をばらまいて格好だけ

つけたどこかのくび長さん。

もう一つ。排出権取引。森林が二酸化炭素を吸収する。嘘言うな。話は半分。森林を構成しているのは樹木です。まず、この樹木。樹木の樹木たるところは連年生長し、長寿であること。確かに樹木は空中の二酸化炭素を取り込みますが、一方で生きるため取り込んだ二酸化炭素から作る代謝産物（ブドウ糖など）を燃やします。燃やせばご存じ二酸化炭素。若いうちは取り込み方が多い（すなわち成長する）が、壮年を過ぎれば両者はトントン。

森林状態ではどうか。森林は樹木などの植物群と土壌で構成されている。植物群が作った有機物（二酸化炭素が半分）は早晚落葉落枝として土壌に落ち、ミミズ、キノコ、微生物群の餌になり、二酸化炭素として空中に放出される。両者は釣り合っており、この物質循環が極めてうまく作動することにより森林が存続しているのです。皆さんが大好きな天然林は

この循環がパーフェクトな森です。でも、二酸化炭素吸収には何も貢献していないのです。お分かりのように、森林・樹木（土壌有機物を含め）は二酸化炭素の貯蔵体ではありますが、吸収体としての機能は極めて限定的なのです。ついでにいえば、人工林が優等生。このことはいずれ他の機会に。

それなのに、森林を無条件に産業（経済体）が放出する二酸化炭素の吸収体に仕上げ、それを金銭取引で片づけるなどという悪質なスキームがまかり通る。これに、およそ有史以来、環境などに関心を示したことのない地上最悪の環境破壊国である中国が悪乗り。何と排出権を外国に売り、またそれを知ってか知らずか、買う国・企業がある。噴飯ものどころか、重大な犯罪行為です。どこまでも厚顔無恥な国・民です。こうなったら殆どエコ仮面舞踏会の様相。

イヤもう止め。新年早々アドレナリン全開では、折角お金を払った（！）降圧剤が効かなくなる。

千葉 喬三 氏

1939年生まれ。国立大学法人岡山大学長。農学博士(京都大学)。(財)おかやま環境ネットワーク理事(前理事長)。